



# コラージュ技法の治癒的要因について～制作者の主観的体験に注目して～

柴田, 由起

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-09-25

(Date of Publication)

2015-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第5976号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005976>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 4)

## 論文内容の要旨

氏名 柴田由起  
 専攻 心身発達  
 指導教員氏名 伊藤俊樹先生

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

コラージュ技法の治癒的要因について  
 ～制作者の主観的体験に注目して～

## 論文要旨

コラージュ療法は、森谷 (1987) が「持ち運べる箱庭」という着想から心理療法の一技法として取り入れ、発展した経緯があり、箱庭療法の治療機序に近いと考えられるが、技法の特性には大きな違いがあり、コラージュ独自の治癒的要因があると思われる。

これまでコラージュ療法の有効性は、気分・感情の変化を検討した研究を中心に数多く報告されてきた。また、基礎研究では、心理的变化 (効果) に注目した研究とともに、表現特徴と性格特性との関連、特定の表現形式に焦点を当てた研究、コラージュ表現の発達の特徴に関する報告が積み重ねられ、これらの成果はコラージュ療法の普及に寄与してきた。箱庭療法やコラージュ療法のような表現療法においては、クライアントとセラピストの信頼関係の深まりとともに自己表現が促され、クライアント自身が自己治癒の過程をセラピストは見守る事が重要だとされている。そこには表現することで自己治癒に繋がるという事をセラピスト自身が経験的に理解し、実践によって確かなものとしていった経緯がある。しかしクライアント自身が自己治癒の過程でどのような体験をしているのか、また自らの作品をどう感じているのかというクライアント側の主観的体験に焦点を当て、治癒に至る心の変遷を明らかにしていくという研究は、箱庭療法の研究では行われているが、コラージュ技法・療法の研究ではほとんど見られない。

そこで本研究では、コラージュ制作自体が制作者に与える効果を検討した上で、制作過程で制作者はどのような心理的体験をしているのかを制作者の主観的体験から考察し、コラージュ技法・療法が持つ治癒的要因を明らかにし、その有用性を示すことを目的とした。

本論文は9つの研究を実施しており、その成果を4部構成の全10章でまとめたものである。以下に、部ごとの内容を示す。

第1部、第1章では、本研究の位置づけと、コラージュ研究の方法論について述べ、現代美術の一技法である「コラージュ」が、「コラージュ技法」や「コラージュ療法」として発展した経緯と、先行研究を概観し、今後のコラージュ研究の課題について述べた。第2章第1節では、前述した問題を踏まえ、本論文の目的を述べた。

第2部ではコラージュ技法の有効性の検討を行った。

第3章では、コラージュ制作自体が持つ技法上の効果を明らかにする為に、セラピスト・クライエン

トの関係が関与しない環境を設定し、技法そのものの効果が測定できるよう配慮して、コラージュ制作 (個別法) が及ぼす心理的变化を数量的に検討した (研究 I)。効果の指標として日本版 POMS 短縮版 (気分・感情、以下 POMS と略す)、NEO-FFI の「開放性」 (内的・外的世界に対する好奇心や関心の度合い) を用いた。研究 I の結果からは、気分・感情が好ましい状態に改善し、内的感受性や創造性が促進された事が「開放性」得点の変化によって明らかになった。POMS の下位尺度と「開放性」の変化は、約1時間の制作時間の中で生じたこころの変容を捉えており、コラージュ技法自体が自己治癒を促す技法であることが示唆された。

また健康度の低い人 (GHQ-12 による) ほど改善の度合いが大きく、制作後には元々健康度の高い群とほぼ同じ水準まで改善したことが明らかになり、臨床的問題を抱える人に対しても効果が期待できることが示唆された。これまでコラージュは、心理療法として様々な臨床的問題を抱える対象に用いられ、症状や問題の改善に至った経緯が事例研究によって報告されてきたが、臨床的問題を抱えた人を対象に、実証的效果を検討した研究は殆ど行われていない。その理由として臨床的問題を抱える臨床群を調査対象にするには、臨床的・倫理的に問題が大きく、治療の妨げになる可能性があるからである。

本研究で明らかになった健康度の低い対象者ほどコラージュ技法による気分・感情の変化が大きく、制作後には健康度の高い人と同じ水準まで改善するという結果は、こころの問題を抱え、精神的健康の促進や改善を目指す臨床群に対しても、効果が期待できるという事を意味しており、意義のある結果と言えるだろう。さらに、制作前後で TMD (Total Mood Disturbance: 下位尺度の緊張・不安、抑鬱、怒り・敵意、疲労、混乱の5各項目の合計得点を、活気の得点で減じた点数で、気分・感情の全般的な改善を見るための指標) の得点差の大きい群と小さい群では、得点差の大きい群の方がポジティブな体験を実感していた事が明らかになった。

第4章では、20歳代～30歳代 (以下成人期とする) のグループと60歳代～90歳代 (以下老年期とする) のグループを対象に、臨床場面におけるコラージュ療法に近い条件を設け、継続制作による心理的变化を検討した。第3章と異なるのは、筆者が立ち会うため、筆者との関わりが生じる事と、集団個人法で作品を制作するため、集団療法的な働きが生じる事である。そこには、筆者が介在する事やグループ成員からの影響も考えられるが、ここでは継続制作によって、どのような体験がなされるのか、また継続制作前後でどのような心理的变化が見られるのかについて検討した。変化を見る為に、成人期のグループ・老年期のグループともに POMS を制作前後で実施し、第1節の“老年期を対象とした継続制作による効果の検討 (研究 II)” では、生きがい感スケールと自尊感情尺度を加え、さらに制作前後の樹木画の印象の変化を数量的に分析し集団でのコラージュ制作が高齢者に対してどのような心理的影響を与えるのかを検討した。第2節の“成人期を対象とした継続制作による効果の検討 (研究 III)” においては、NEO-FFI の「開放性」と、人格的な成長をみるために心理的 wellbeing 尺度から「人格的成長」「自己受容」「環境制御力」を選び、コラージュの継続制作によって自己受容や人格の成長が促されるのか、自己啓発としてコラージュ技法が有効な方法と言えるのかを検討した。結果、研究 II では、生きがい感が高まり、気分・感情にも好ましい変化がみられた。また研究 III では、気分・感情に変化は見られなかったものの、開放性が高まり、コラージュ制作が人格の成長や自己受容を促したという結果を得た。

第5章の研究 IV では、88枚のコラージュ作品を印象ごとに5つのクラスタに分類し、各クラスタに属する制作者のパーソナリティと制作体験の関連を考察し、クラスタごとに心理的变化を検討した。研究 I のように数量的分析のみで効果を測る場合、有意な差が認められたとしてもすべての人に効果があったわけではなく、改善の見られなかった人もいた。その意味では、研究 IV で、改善の見られない人の作品印象やパーソナリティ特性を示せたことは意義のある事だと思われる。例えば、クラスタ II の人たちのように、パーソナリティ特性として、神経症傾向と開放性が高く外向性の低いいわゆる芸術家タイプの人や、クラスタ III のように神経症傾向が低く精神的に安定したパーソナリティ特性を持ちながらも開

放性が低い人には、気分・感情の改善がみられないという結果となり、心理面で改善がみられる人とみられない人の制作体験やパーソナリティ傾向に違いがあった。

第3部では制作者の心理的な変容を質的側面から検討した。

まず第6章では、コラージュ制作による心理的変容を老年期(21名)の作品の表現内容から考察し(研究V)、第7章では、臨床群(認知症患者)を対象に回想法とコラージュ療法を併用し、治療的效果について検討した(研究VI)。研究Vでは高齢者の表現特徴と、制作者が語ったイメージや連想から、何を表現し、それをどのように心におさめていったのかについて考察を行った。その中で、作品に表現された各アイテムは、個々に意味付けされたものでありながら共通のイメージから生まれている事が推測された。特に「宗教的イメージ」や「宇宙のイメージ」「円環のイメージ」は元型的イメージと通じるものがあり高齢者のこころを理解する上で、重要な手掛かりを与えてくれるものだと思われた。また過去・現在・未来をあらわす表現や、つなぐことを意味するアイテムが頻繁に使用され、他の年代に比べ制作者自身の人生の流れが作品に表現される事が多いという印象を持った。一方、認知症高齢者の作品を見ると、イメージの多様性や豊かさを感じさせる表現は見られず、一つひとつの切り抜きを、意味のあるままとりとして構成していく事が難しかったのか、調和やバランスの悪さが目立った。また健常高齢者は、意識的な表現の中に生じる無意識的な表現の意味を探ろうと心を働かせるが、認知症高齢者は、意図したことを忘れてしまい、一貫した流れの中で表現していく事も、それを理解する事も困難な様子であった。しかし、出来事や体験の記憶が残らない場合でも、その時生じたイメージは残っており、それが表現されることもあった。第6章と第7章の考察からは、健常高齢者や認知症高齢者にとって制作過程に認知機能を賦活させるような工程が含まれており、レディーメイドの素材を使用する事による美的満足が得られやすく、特に日常生活の中で自己肯定感が低下している認知症高齢者には有効な技法だという事が示唆された。

第8章では、第4章で得られた知見を踏まえ、心理的変容のプロセスをさらに明確に示すために、教育分析において分析者とのやり取りの中で語られた被分析者の発言から「コラージュ制作過程、作品を理解していく過程でどのような体験をしているのか」に注目し、制作者の内的変容のプロセスをM-GTAを用いて分析した(研究VII)。そして、発言の内容を2つの上位カテゴリー『制作時における制作者の内的体験(制作時に体験された制作者の体験)』と『現在の「私」の視点で作品と向き合う(教育分析によって気付きを得る過程)』で示し、それぞれの変容プロセスを明らかにした。まず、制作時の素材選択においては、直感・感覚・感情・意識のいずれかが優位に働くものの、1枚の作品に貼られた素材全てが同じ選択要因である事は稀で、同じ作品であっても、それぞれの素材は異なる要因から選択され構成されて行く事が示された。そしてその後の制作過程では、表現を行うという意識的姿勢をベースに、[意識的・操作的構え]と[意図せず生じた経験・心理的状態]が双方に影響し合いながら制作が進み、素材選択と同様に直感的・感覚的・感情的・意識的な心の動きが相互に作用しながら表現が展開していく事が明らかになった。次に、教育分析の場で改めて作品を見る時、制作者は制作時の視点ではなく『現在の「私」の視点で作品と向き合う』ことになる。つまり作品からの視覚的フィードバックという体験である。被分析者は、今ここで自らが体験している感情やイメージを言葉にしながら心理的な機制を弱め内界の動きに注意を向ける。この時イメージは自律的に動き始め、イメージが次のイメージの母胎になってさらに展開し連想も広がっていく。そして次第にイメージの内容と自分自身の経験が結びつき、内的世界への探索が始まる。漠然としていたイメージや連想は、はっきりと意味のあるものとして捉えられ、現在の「私」が抱える問題や課題を認識していく。このような内的プロセスは3名の被分析者に見られ、制作者自身が意識的に気付いていなかった心の状態に気付いて行くという過程を辿った。被分析者にとってコラージュを制作するという体験も、作品からの視覚的フィードバック

を有効に利用した分析者とのやりとりからも内的イメージを外在化し、その意味に気付いて行くという創造的な作業であった事が示唆された。

第9章第1節の研究VII-1では、研究VIIの対象者のうち被分析者1名の事例を用いて「制作者がコラージュで表現をどのように受容していくのか」「継続制作の中で制作者の内的体験がどのように変化していくのか」を、被分析者の語った作品の感想、イメージ、連想、気付きなどの発言から考察した。第8章では継続制作の過程でどのような変容が生じ、自己理解・自己受容に繋がったのかについては十分な検討が行われておらず、制作者個人の自己成長や、コラージュ表現の個人的意味についての検討を加える必要があると思われた。事例検討によって明らかになったことは、制作者がイメージや連想を広げ、そこから自身のこころと向き合い気付きを得ていくプロセスの中で、作品に表現された自分自身の無意識からのメッセージを受け止め、自分自身と向き合い、無意識に封じ込めていた過去の情緒的体験や出来事を認識し、問題の本質に触れ、それを受容するという体験が生じていたことである。しかし、そこには情緒のバランスを崩しかねないような体験も生じていたと思われる。加藤(2004)は、「心理療法は、無意識に抑圧された心的事象を、意識化することにより、心の再統合をなし、適応行動を導こうとするものである」としているが、コラージュという表現媒体を用いた心理療法においても人格成長へと向かうプロセスの中では、心のバランスを維持するために一旦無意識に押し込めた過去の受け入れがたい出来事や感情を、表現されたものから認識し、それを意識化へと繋げていくという内的プロセスを辿るという事が示唆された。

第9章第2節では、第4章第2節、研究IIIの対象者(成人期17名)が振り返り面接で語った主観的体験をもとに、制作者の内的変容と自己理解・自己受容に至ったプロセスを明らかにする事を目的に、作品理解・自己理解・自己受容に関わる発言をM-GTAによる分析によってカテゴリー化し、その「語り」の内容から内的変容を促す要因について検討した(研究VII-2)。研究IIIでは継続制作による効果を量的に検討し、気分・感情に変化は見られなかったものの、開放性が高まり、コラージュ制作が人格の成長や自己受容を促したという結果を得た。しかし、数量的分析の結果だけでは、何故変化が生じたのかという変化の要因を正確に捉えることは出来ず、自己治癒の要因とされる自己理解と自己受容に至るまでのプロセスは、治療的な機序を説明するためには欠かせない要素であると考えられた。語りを分析した結果、コラージュ制作を、もっと自分を掘り下げ、自分自身を理解し、自己を成長させるための機会にしたいという思いが語られており、全般的に、ただ楽しく作品を作るのではなく、自分自身と向き合い、自己成長の場としてコラージュ制作に臨むという傾向がみられた。第4章の研究IIIでは、「人格的成長」「自己受容」に変化がみられたものの、気分・感情にはポジティブな変化は見られなかった。その理由の一端が、自己探索の姿勢にあるように思われた。作品理解、自己理解から自己受容に至るプロセスでは、ネガティブな感情・感覚・イメージも受け止めなければならず、様々な葛藤を体験する。また情緒的理解による自己受容は容易なことではなく、意識化に心理的苦痛が伴う。制作後に気分・感情に変化が示されなかった理由としては、このような内的な体験に意識と注意が向けられていたため一時的な気分・感情に効果を及ぼすというより、むしろ、より深い心の層に働きかけ、内的な安定性や内的な成長をもたらしたからだと推測された。

第4部では、本論文の総合的考察を示した。まず、各研究で得られた知見をまとめた。その上で、各研究の結果から示唆されたコラージュ技法・療法の治療的要因を示し、臨床心理学的意義をまとめ、最後に、今後の課題について論じた。

論文審査の結果の要旨

氏名	柴田由起		
論文題目	コラージュ技法の治癒的要因について ～制作者の主観的体験に注目して～		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	准教授	伊藤 俊樹
	副査	教授	森岡 正芳
	副査	教授	吉田 圭吾
	副査	教授	伊藤 篤
	副査	准教授	津田 英二
要 旨			
<p>本研究は、心理療法の一技法であるコラージュ療法を取り上げ、コラージュ制作自体が制作者に与える効果を検討した上で、制作過程で制作者はどのような心理的体験をしているかを制作者の主観的体験から考察し、コラージュ技法・療法が持つ治癒的要因を明らかにし、その有用性を示すことを目的としたものである。</p> <p>第3章の研究Ⅰでは、コラージュ技法自体が持つ技法上の効果を明らかにするために、セラピストクライアントの関係が関与しない環境を設定し、コラージュ制作が及ぼす心理的变化を数量的に検討している。以上から POMS の下位尺度と「開放性」の変化より、気分・感情が好ましい状態に改善することが分かった。即ち、コラージュ技法自体が自己治癒を促す技法であることが示唆された。また健康度の低い人ほど改善の度合いが大きく、臨床的問題を抱える人に対しても効果が期待できることが示唆された。</p> <p>第4章では、20歳代～30歳代（以下成人期とする）のグループと60歳代～90歳代（以下老年期とする）のグループを対象に、臨床場面におけるコラージュ療法に近い条件を設け、継続制作による心理的变化を検討し、結果、研究Ⅱでは、生きがい感が高まり、気分・感情にも好ましい変化がみられた。また研究Ⅲでは、気分・感情に変化は見られなかったものの、開放性が高まり、コラージュ制作が人格の成長や自己受容を促すという結果を得た。</p> <p>第5章の研究Ⅳでは、88枚のコラージュ作品を印象ごとに5つのクラスタに分類し、各クラスタに属する制作者のパーソナリティと制作体験の関連を考察し、クラスタごとに心理的变化を検討し、印象分析による作品の分類と、制作者の体験、制作者のバ</p>			

ーソナリティ傾向との間に関連があることが分かった。

第3部では第6章で、コラージュ制作による心理的変容を老年期（21名）の作品の表現内容から考察し（研究Ⅴ）、第7章では、臨床群（認知症患者）を対象に回想法とコラージュ療法を併用し、治療的効果について検討した（研究Ⅵ）。考察からは、健常高齢者や認知症高齢者にとって制作過程に認知機能を賦活させるような工程が含まれており、既成の素材を使用する事により美的満足が得られやすく、日常生活の中で自己肯定感が低下している認知症高齢者には有効な技法だという事が示唆された。

第8章では、第4章で得られた知見を踏まえ、心理的変容のプロセスをさらに明確に示すために、教育分析において分析者とのやり取りの中で語られた被分析者の発言から“コラージュ制作者はコラージュ制作過程、作品を理解していく過程でどのような体験をしているのか”に注目し、制作者の主観的体験をM-GTAを用いて分析し、コラージュ制作による内的変容プロセスを示した（研究Ⅶ）。

第9章第1節の研究Ⅷ-1では、研究Ⅶの対象者のうち被分析者1名の事例を用いて“制作者がコラージュで表現をどのように受容していくのか”“継続制作の中で制作者の内的体験がどのように変化していくのか”を、被分析者の語った作品の感想、イメージ、連想、気付きなどの発言から考察した。

第9章第2節では、第4章第2節、研究Ⅲの対象者（成人期17名）が振り返り面接で語った主観的体験をもとに、制作者の内的変容と自己理解・自己受容に至ったプロセスを明らかにする事を目的に、作品理解・自己理解・自己受容に関わる発言をM-GTAによる分析によってカテゴリー化し、その「語り」の内容から内的変容を促す要因について検討した（研究Ⅷ-2）。第4部では、本論文の総合的考察を示した。まず、各研究で得られた知見をまとめた上で、各研究の結果から示唆されたコラージュ技法・療法の治癒的要因を示し、臨床心理学的意義をまとめ、最後に、今後の課題について論じた。

本論文は、第2部では数量的分析によってコラージュ技法の有効性を示し、第4部の総合的考察で、コラージュ制作が心理的变化をもたらした技法上の5つの要因と、遊びの感覚やびったり感など改善に関わると思われる要因を示した。また第3部では、質的分析から得た知見から、治癒・変容の要因と推測される体験について検討し、それぞれの研究で制作者の主観的体験による治癒・変容へのプロセスと、その要因を明らかにした。制作前後でどのように変化したのか、そしてその過程ではどのような体験が生じていたのかを明らかにする事により、量的・質的両側面からコラージュ療法・技法の有用性を示せたという点で意義のある知見を得たと思われる。

本研究は、近年になって、急速に発展してきたコラージュ技法について、その治療効果、治癒的要因、制作者の内的体験を研究したものであり、臨床心理学の分野で重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の柴田由起は博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

尚、学位申請者は、本論文に関わる下記の査読付き学術論文を2編発表しており、博士学位申請の基本的要件を満たしている。

柴田由起（2012）老年期女性の自尊感情、生きがい感、気分や認知の変容について—老年期女性へのコラージュ継続制作を試みて—

臨床描画研究, 27, 169-186

柴田由起（2012）コラージュに表現された高齢者の内的世界—老年期女性の作品から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 6, 1, 9-18.